

Title	<大會抄録>秦漢時代の金・布帛・銅錢
Author(s)	山田, 勝芳
Citation	東洋史研究 (1989), 48(3): 599-600
Issue Date	1989-12-31
URL	http://dx.doi.org/10.14989/154283
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

かがわかり、また七世紀後半の儀鳳年間においては西方の防衛にかなり比重がおかれていたこと、それを支えたのが毎年の度支奏抄であったことが推測できる。

中國合作運動の創始と初期活動

菊池 一 隆

合作社は中國近現代の政治、經濟、社會、教育諸側面において極めて重要な役割を擔ってきた。にもかかわらず、僅かな研究も一九三〇年、四〇年代に集中し、五・四運動前後から二〇年代はほとんど未開拓のまま残されている。本発表では、こうした研究現状の打開のために、中國ではいつから合作社が始まったのか、五・四運動との關連はどうか、いかなる推移を辿ったのか等について、一九一八、一九年から二四年までに焦點を絞りに論じたい。すなわち、この數年間は、五・四運動にも啓發され、各種社會主義思想の一つとして、海外思想たる協同組合思想が「救國」の社會改造思想として目的意識をもって上海、北京の知識人、學生に受容され、宣傳され、かつ實際に信用、消費、生産の各種合作社が組織された時期である。彼らは協同組合理論を研究するとともに、一般に考えられている以上に、ドイツ、イギリス、フランス等々の各國協同組合の現状、歴史、および國際協同組合同盟の主張にも通じ、そこから多くのことを學ぼうとした。しかし、協同組合思想を「危険思想」とみなす軍閥の彈壓や江浙戰爭もあり、二四年には組織された合作社のほとん

どが姿を消してしまうことになるのである。これらの初期合作社の實狀、および歴史的意義と限界を實證的に考察してみたい。

秦漢時代の金・布帛・銅錢

山 田 勝 芳

前漢後期に貨幣經濟の衰退が始まるのか否かは秦漢時代全體の理解にも關わる重要問題であり、本発表はこれを中心問題とする。

秦は先進貨幣經濟の影響下にいわば受け身の形で貨幣經濟に入ったが、やがて國力強化を背景として兩銖制に基く半兩錢を發行し、同時に金と布をも貨幣とした。しかし獨自の規定の布制は金錢の増加によって行われなくなった。また銅錢發行以後、盜鑄を禁止し、かつ外國の貨幣流通による經濟の混亂を防ぐべく「通錢」という禁止規定を設けた。

漢初の方孔圓錢たる半兩錢への急激な轉換と文帝代の四銖半兩錢を経て、武帝代では、半兩錢を廢して五銖錢への急激な切り換えを行うために郡國にそれを發行させ、その後、溫存しておいた中央の錢銅を以て名目五錢の赤側五銖を鑄造して莫大な收入を得たが、次いでそれを廢し、三官五銖のみとした。五銖錢の鑄造總額二八〇億のうち、かなりの量がこの武帝代に鑄造されており、前漢後期の錢鑄造額は原料の制約もあって少なかった。

一方漢初豊富であった金は武帝代以降國外に流出する量が多く、銅錢不足と相俟って前漢後期には貨幣經濟の衰退が始まる。また布

帛、とりわけ帛は富として所藏されることもあったが、前漢後期に貨幣的機能をも始め、王莽代以降、後漢代に貨幣化する。そしてこれは右の衰退という事態と相應する。

ホージャ・アフラーの不動産登記文書

——十五世紀中央アジアの不動産所有について——

川 本 正 知

十五世紀後半、ティムール朝治下のサマルカンドにおいて、イスラム神祕主義教團ナクシュバンディー教團のシャイフとして活動したホージャ・アフラーは莫大な不動産を所有していたことが知られていた。しかし、その實態を具體的に知ることができるようになったのは、一九七四年チェホヴィチによって、彼の不動産に関する文書集が出版されたことによる。

この文書集には十五世紀の文書が十二通含まれ、そのうちの四通がワクフ文書、残りの八通がいわゆる不動産登記文書である。イスラム圏全體を見回してもこの八通の不動産登記文書は、出版されたものとしてはもっとも初期のものに屬する。

この八通の不動産登記文書の書式、内容を調べていくことによって當時の中央アジアにおける不動産所有、すなわち *malik* 所有とはどういうことであったかを明らかにしてみたいと思う。それはおそらく、ワクフと同じように、單に中央アジアにとどまらずイスラム圏全體におけるこの時期の不動産所有ということを考えるための一

例とすることができであろう。また、そうすることによってホージャ・アフラーという人物の莫大な不動産所有を當時のイスラム社會の文脈の中で正當に評價することができるであろう。

乾隆カシユガル蜂起

——伯克支配力とオアシス權力構造基底部——

眞 田 安

乾隆二十五年七月に、カシユガル地方のベシユケリム地方を中心に蜂起が發生した。この蜂起は、清朝の新疆統治上の觀點からすれば微々たるものにすぎなかったが、この蜂起を分析することによって、あたかも火山から噴出したマグマの分析が地球の内奥部を知らしめるように、オアシス社會の内部が明らかになってくる。

當蜂起の指導者は、行政行爲を逸脱した權力行使を専らにしていたというウイグル人支配者伯克 (*Bek*) 層のうち、征服者清朝と結びついた三品阿奇木伯克とは別の、カシユガルで採用、任命された、いわば土着伯克層である。この伯克たちの動向、蜂起の原因、動員力、地域的廣がりを考えることにより、土着伯克の支配力の實像が浮びあがる。彼ら伯克の支配力の實態の中に、征服者權力と同時に土着支配者からもウイグル人民衆が支配されていた支配の枠組、換言すれば支配者側の權力行使が可能な權力構造の、その基底部分が露わになっている。そして、そのような民衆に對する權力の接點の部分が見えて來た時、かつてラケットがワクフ文書として紹